松本市文化財調査報告 №183

長野県松本市

*TSUKAMA*

# 筑摩遺跡 Ⅲ

――緊急発掘調査報告書――

信州大学附属図書館
定期刊行物

*2006.3*

松本市教育委員会

# 例　言

1.　本書は、平成17年4月25日～5月17日に実施された松本市筑摩2丁目2851-1ほかに所在する筑摩遺跡第3次調査の緊急発掘調査報告書である。

2.　本調査は、長野県労働者住宅生活協同組合によるに宅地分譲事業（15区画）に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。

3.　本書の執筆は、Ⅱ：清水　究、Ⅴ-2：内堀　団、その他を竹内靖長が行った。

4.　本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子

土器陶器接合・土器拓本：中澤温子

土器陶器実測：上條信彦、竹内直美

土器陶器トレース・図版作成：竹内直美

金属製品整理：内堀　団、洞沢文江

遺構図調整・トレース・図版作成：村山牧枝

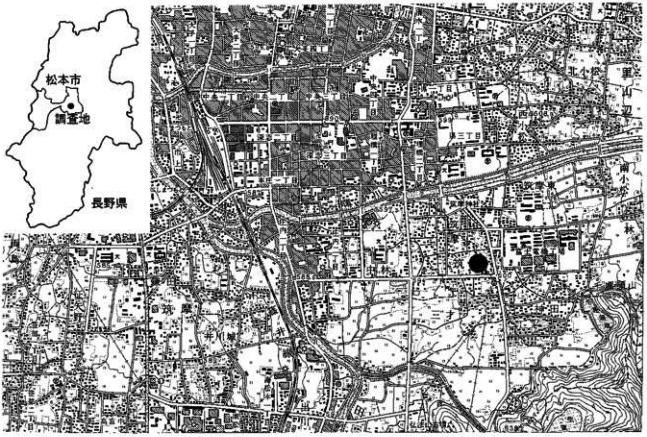
遺 物 写 真：宮嶋洋一

総 括・編 集：竹内靖長

5.　本書で使用した略称は以下のとおりである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P

6.　本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823　長野県松本市大字中山3738-1　TEL 0263-86-4710　Fax 0263-86-9189）に収蔵されている。




●今回の調査地　S＝1：25000

第1図　調査地の位置

# Ⅰ　調査の経緯

## 1．調査に至る経過

今回の調査地点は、松本市街地南東の同市筑摩周辺に位置している。北側には、本市東部の扉峠付近を源流とする薄川が流れ、本遺跡はこの扇状地上に位置している。当該遺跡は過去2度にわたって発掘調査が実施され、古墳時代～奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されていた。

今回、当該遺跡内において長野県労働者住宅生活協同組合による宅地造成事業が計画され、文化財保護法第57条の2に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が平成17年3月1日付で提出された。届出に対しては、長野県教育委員会より発掘調査の指示が平成17年3月9日付で届出者に通知されている。松本市教育委員会では、事業予定地内の遺構等の有無を確認するため事前に試掘調査を実施して、その結果をふまえ埋蔵文化財の保護について協議を行なうことで事業者と調整した。

試掘調査は、平成17年3月10日・11日に松本市教育委員会が実施した。この結果、4箇所の試掘トレンチのうち（第3図）、事業予定地北東隅の第4トレンチにおいて古墳時代と平安時代を中心とした遺構・遺物が確認され、この地点の埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。そこで、事業者と松本市教育委員会が埋蔵文化財の保護について協議を行ない、遺構・遺物が発見された箇所を中心に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

発掘調査およびこれに係る事務処理については、松本市教育委員会が実施することとし、埋蔵文化財発掘調査委託契約は事業主との協議の結果、土地所有者の横内 周氏との間に締結された。（委託者：松本市筑摩2丁目14番21号　横内 周　　受託者：松本市丸の内3番7号　菅谷　昭、委託契約締結日：平成17年4月15日）さらに、平成17年8月31日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部を変更する契約が行なわれた。

現場での発掘調査は平成17年4月25日～平成17年5月17日にかけて行なわれた。調査面積は71.9㎡である。調査終了後、平成17年5月18日付で長野県教育委員会に終了報告書を提出し、また同日に松本警察署に埋蔵物発見届を行ない、平成17年5月26日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行なった。

## 2．調査体制

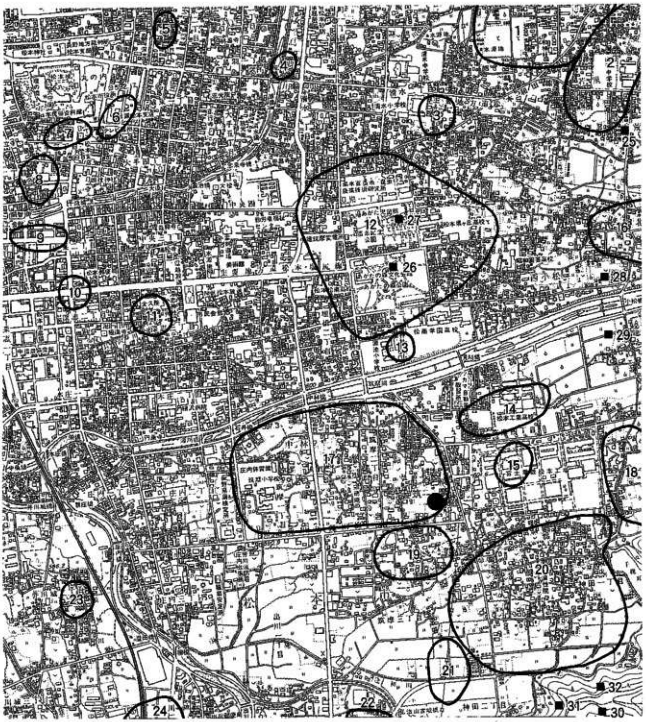
**調査団長**：竹淵公章（教育長）

**調査担当者**：竹内靖長（文化財課主任）、清水　究（同 嘱託）

**調　査　員**：今村　克、森　義直

**協　力　者**：荒井留美子、飯田三男、上條信彦、竹内直美、中澤温子、洞沢文江、待井敏夫、道浦久美子、村山牧枝、百瀬二三子、山崎照友

**事　務　局**：松本市教育委員会教育部文化財課
宮島吉秀（課長）、市川恵一（部課長）、熊谷康治（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、
直井雅尚（主査）、櫻井　了（主事）、渡邊陽子（嘱託）、花村かほり（同）



● 印：今回調査地点　■ 印：古墳　S＝1：15000

1：宮北遺跡　2：下原遺跡　3：四ツ谷遺跡　4：女鳥羽川遺跡　5：片端遺跡
6：丸の内遺跡　7：大名町遺跡　8：土居尻遺跡　9：伊勢町遺跡　10：本町南遺跡　11：天神西遺跡
12：県町遺跡　13：埋橋遺跡　14：筑摩北川原遺跡　15：筑摩南川原遺跡　16：北小松遺跡
17：筑摩遺跡　18：千庖頭北遺跡　19：三才遺跡　20：神田遺跡　21：神田西遺跡　22：平畑遺跡
23：小島遺跡　24：出川遺跡　25：荒町古墳　26：県塚１号古墳　27：県町２号古墳
28：北川原屋敷古墳　29：巾上古墳　30：中山34号古墳　31：中山35号古墳　32：中山56号古墳

**第２図　筑摩遺跡と周辺の遺跡**

# Ⅱ　遺跡の位置と環境

## 1．地形・地質

筑摩遺跡が所在する松本市筑摩は、市街地の南東部に位置している。調査地北側には、東方の扉峠などを源流とする薄川が流れ、一帯はこの河川の氾濫の影響が強くみられる。薄川は出水率が非常に大きな河川で、氾濫時における土砂の流出が多いため、短年月のうちに天井川化し、より低い方へ流路が移って行く傾向がある。奈良時代以降の薄川本流は、度重なる洪水で土砂が堆積して自然堤防ができると、入山辺地区南方付近やそれより下流で流れを北側に変え、県町遺跡の北側をかすめて、当時低湿地であった駅前通り付近で川幅を広げて、田川に流入したものとみられる。

今回の本調査区域内では氾濫原の痕跡がほとんど見られず、比較的安定した場所であったようである。しかし事前に実施した試掘調査箇所では、すべて砂礫の洪水層が確認されている。本調査箇所の堆積土は、洗い出しによって砂粒のひとつひとつの粒が細かく、堆積層の厚さも薄い状況にある。よって、当該地に影響を及ぼした氾濫は薄川の本流ではなく、支流によるものの可能性が高い。また、試掘・本調査の土層観察から、氾濫は過去1度だけ起きたものではなく、何度も起きたものと推測される。

## 2．遺跡周辺の歴史

筑摩遺跡は今回の調査で第3次調査となる。第1次調査は平成6年度に行われ、古墳時代中期の住居址、土坑、溝と奈良時代後半の住居址が認められた。第2次調査は平成8年度に行われたが、過去に大規模な整地・盛り土がなされていたため、遺構・遺物は確認されなかった。

筑摩遺跡周辺の遺跡の分布状況は第2図のとおりである。以下、時代ごとに代表的な遺跡を列記していく。縄文時代の代表的な遺跡として女鳥羽川遺跡があげられる。昭和45年度の調査では、主に後期～晩期の土器、石器、土偶、有孔・無孔の円盤、耳飾りなどが河床下の集石遺構などから確認されている。また、平成14年度の調査では、同じく後期～晩期の土器と石器が出土している。

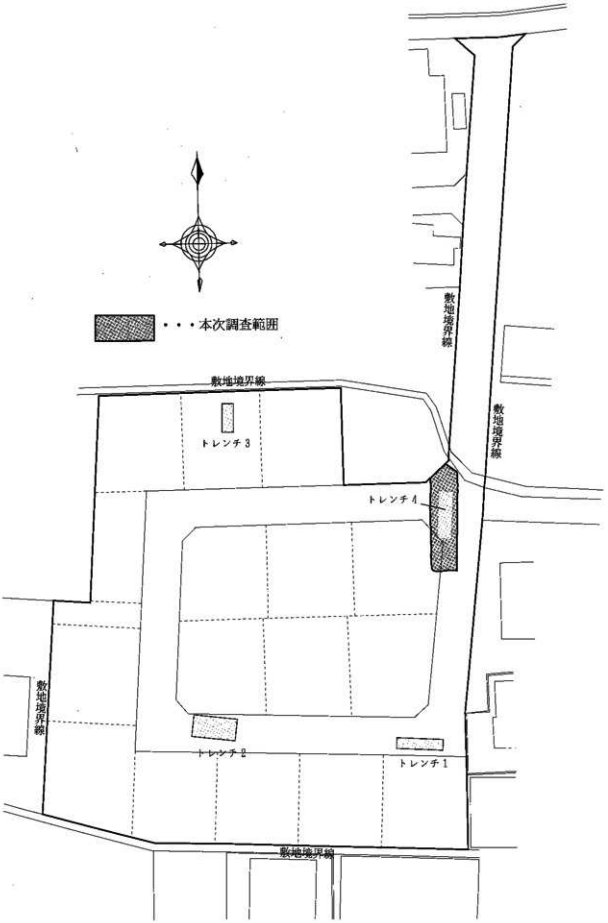
弥生時代の遺跡としては、県町遺跡が有名で、あがたの森公園造成時に住居址44軒のほか多くの遺構・遺物が確認されており、この地域を代表する遺跡である。

古墳時代の遺跡としては千鹿頭北遺跡と神田遺跡が代表的である。千鹿頭北遺跡の大規模な調査では、昭和62年度に古墳時代前期と後期の竪穴住居址が合わせて47軒、後期の掘立柱建物址6棟が見つかっている。また、平成13年度の神田遺跡の調査では、古墳時代前期～中期の竪穴住居址9軒と掘立柱建物址1棟が確認され、古墳時代の古い様相を窺い知ることができる。

奈良～平安時代の遺跡では、神田遺跡があげられる。昭和63年度の調査では奈良～平安時代中頃の竪穴住居址などが認められ、住居のカマドに関して良好な資料を得ることができた。また県町遺跡では、これまでに70軒以上の竪穴住居址が発見されており、付近の拠点的な集落址と考えられる。平成13年度の調査では、平安時代の竪穴住居址が27軒確認され、土師器・須恵器の他に緑釉陶器（緑彩文椀・刻書のある杯・三足盤など）や石製帯飾りなどが出土しており、遺跡の特異性が窺える。

中世の遺跡では、平成3年度に三才遺跡で室町時代の竪穴状遺構2基や土坑、ピットなどが確認されている。また、平成16年度の神田遺跡の調査では、直角に曲がる溝と15世紀代の瀬戸美濃産陶器や内耳鍋片が出土している。また、筑摩遺跡内でも過去の試掘立会い調査において、中世に帰属するピット群を確認している。

筑摩遺跡の周辺は以上のように多様な時代の遺跡が確認されている。




※トレンチ1～4は試掘トレンチ　　S=1/600

**第3図　調査範囲図**

# Ⅲ　調査の概要

今回の発掘調査は、試掘調査で遺構・遺物が確認された箇所を中心に71.9㎡の調査区を設定した。

まず試掘結果をもとに、重機により確認トレンチを掘削しながら表土除去を行った。現地表面から遺構面までの土層堆積状況をみると、上層から順に耕作土・灰褐色土・淡灰褐色土の堆積がみられ、その下層の褐色土層面において遺構を確認した。現地表から40～60㎝を測る。遺構検出作業や掘り下げ作業は人力により行なった。遺構の検出は、褐色土層中に黒褐色土ないし暗褐色土で確認できた。遺構測量作業は、任意の3m方眼を設定し、後に基本点に国家座標を移設した。遺構番号は1から付している。今回の調査および過去の調査結果は、下記のとおりである。

**今回の調査結果**（第3次調査）

調査期間：平成17年4月25日～5月17日

調査面積：71.9㎡

検出遺構：竪穴住居址3、土坑14、ピット18、溝1

出土遺物：土器・陶器（土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器）、金属製品（釘）

**過去の調査**

＜第1次調査＞

原因事業：筑摩児童センター建設

調査期間：平成6年6月7日～7月16日

調査面積：857㎡

検出遺構：竪穴住居址5（古墳時代中期4、奈良時代1）、土坑7、ピット多数

出土遺物：土師器（高杯・坩・甕など）、須恵器（杯・甕など）

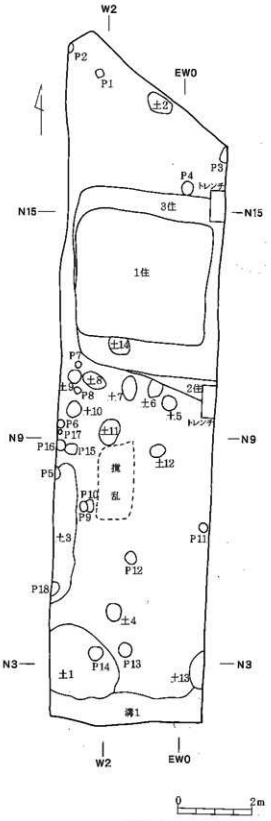
＜第2次調査＞

原因事業：筑摩デイサービスセンター建設

調査期間：平成8年9月11日～9月12日

調査面積：180㎡

遺構・遺物：撹乱がひどく詳細不明




第4図　遺構全体図

# Ⅳ 遺 構

## 1．竪穴住居址

### 第1号住居址

調査区中央北寄りに位置する。遺構検出時には3住のプランのみを確認していたが、掘り下げ時に土層断面で、1住が3住を切る2軒の切り合いであることを確認した。平面形は隅丸方形、規模は長軸344×短軸336cmを測る。壁高は20cmで、やや斜めに立ち上がる。床面は、全面貼床が確認できた。床面上にはピットが9基確認できた。このうち$P_4$・$P_8$は掘り方が深く柱穴の可能性はあるが、土層断面には柱痕は確認されなかった。遺物は覆土中および床面上から出土したが、特に住居北西隅では床面上からに集中してみられた。このうち、ほぼ完形の土師器杯第7図9・10は床面上に逆位の状態で出土し、11には「尖」の刻書がみられた。カマドは、袖石などの構築材が全く発見されなかったため判然としないが、西壁南寄りに炭・焼土が集中している箇所がみられ、唯一その可能性が指摘できる箇所である。本址出土土器群の時期は、平安時代11世紀末の時期が推定される。

### 第2号住居址

調査区中央北寄りに位置する。1住・3住に切られる状態で検出された。南壁の一部しか残存していないため、平面形は不明である。壁はやや斜めに立ち上がり、壁高は26cmを測る。床面は貼床はみられず、地山面を床面として捉えた。ピット・カマド等の住居内施設も確認されていない。本址の時期は、出土遺物が少ないので判然としないが、破片資料から古墳時代後期に比定される。

### 第3号住居址

調査区中央北寄りで1住・土14に切られ、2住を切る。北・南壁の一部しか残存していないため、平面形は不明である。壁はほぼ直に立ち上がり壁高は22cmを測る。床は、西壁際には貼床がみられないが、南北壁際中央付近には貼床がみられる。ピット・カマド等の住居内施設は確認されていない。出土遺物が非常に少ないため、本址の時期は判然としない。

## 2．土坑

今回の調査では、14基の土坑が発見された。遺物が出土したのは土1・3の2基のみで、いずれも弥生時代中期後半の土器である。土1は調査区南西隅で検出された。南側を溝1に切られ、西側は調査区外に延びている。残存部の規模は183×187cmで、隅丸方形もしくは不整円形と推定される。底面までの深さは、35cmを測る。南端は自然流路と考えられる溝1に切られている。覆土中および底面から弥生土器が出土したため、本址は該期の遺構と考えられる。本址は土坑としたが、規模が大きいため竪穴状遺構もしくは住居址の可能性も考えられるが判然としない。土3は調査区西端中央南寄りに位置し、P5・P18に切られる。全体的に掘り込みが浅く、壁高は6cmほどしかない。平面形は、細長い溝状を呈するものと思われる。覆土中より、弥生時代中期後半の土器片が出土した。

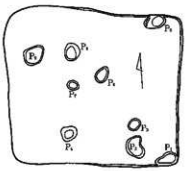
## 3．ピット

今回の調査では18基のピットが発見された。調査区ほぼ全域から検出されているが、特に中央部の住居址周辺に集中している傾向が窺える。遺物が出土したピットはなく、所属時期は不明である。

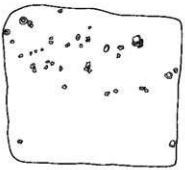
## 4．溝

調査区南端で1条の溝が検出された。自然流路の氾濫した痕跡と考えられ、覆土中の砂礫は、薄川系のものが含まれている。覆土中に18c末～19c初頭の瀬戸美濃産拳骨茶碗片が含まれていたことから、近世末以降に氾濫した流路の痕跡と考えられる。

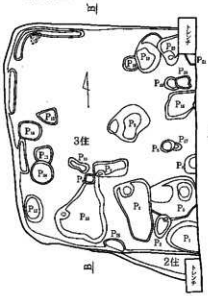
## 第１号住居址




## １住遺物出土状況



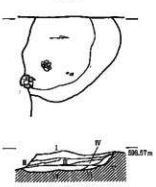
## 第２・３号住居址



Ⅰ：灰褐色土（シルト質、砂砂含）黄褐色土粒、灰色土粒、炭粒
Ⅱ：暗灰褐色土（シルト質、細砂含）灰色土粒、褐色土粒
Ⅲ：黒褐色土（シルト質、細砂含）
Ⅳ：暗褐色土（細砂質、シルト含）
Ⅴ：灰褐色土（シルト質）灰色土粒
Ⅵ：暗褐色土（シルト質、細砂含）黄褐色土粒、灰色土粒、炭粒
Ⅶ：褐色土（細砂質、粗砂含）白色砂粒
Ⅷ：暗褐色土（細砂質）黄褐色土粒少量
Ⅸ：暗褐色土（シルト質、細砂含）黄褐色土塊少量
Ⅹ：褐色土（シルト質、細砂含）
Ⅺ：暗褐色土（シルト質、細砂含）
Ⅻ：褐色土（シルト質）黄褐色土塊少量
XIII：褐色土（細砂質、粗砂含）
XIV：灰褐色土（細砂質、粗砂含）小礫
XV：淡灰褐色砂ブロック
XVI：暗褐色土（シルト質）黒褐色土塊
XVII：褐色土（シルト質）
XVIII：黒褐色土（シルト質）
XIX：黒褐色土（シルト質、暗色土粒少量）

※土層図は１～３住共通

## ±1




Ⅰ：暗灰色砂質土（シルト質）
Ⅱ：淡灰色土（シルト質）暗灰色土粒、砂分
Ⅲ：灰色土（シルト質、細砂・粗砂含）白色砂粒
Ⅳ：淡灰褐色土（シルト質、細砂含）白色砂粒、砂分
Ⅴ：淡灰褐色土（シルト質、細砂含）砂分
Ⅵ：灰褐色土（粗砂質）砂分
Ⅶ：砂礫層（粗砂質）帯

## ±2

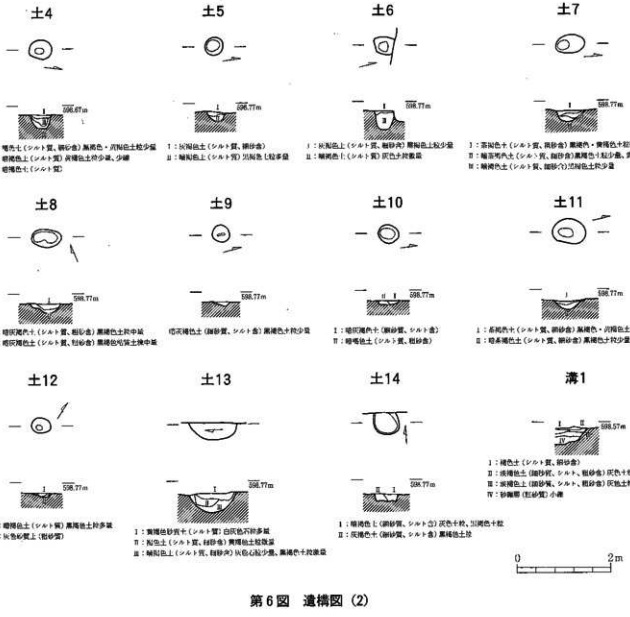
暗黄褐色土（シルト質）黒褐色土粒・黄褐色土粒少量、小礫

## ±3

Ⅰ：褐色土（粗砂質、細砂含）茶褐色土塊
Ⅱ：暗褐色土（シルト質、細砂含）




第５図　遺構図（1）




第６図　遺構図（2）

# Ⅴ　遺物

## １．土器・陶器（第８図・第６表）

今回の調査では、各遺構および包含層から土器・陶器が7,110ｇ出土した。このうち、図化可能な31点を実測し、提示した。

**第１号住居址出土土器群**

計19点を図化している。種別は、土師器・黒色土器・灰釉陶器・須恵器がある。土師器は杯・鉢・甕がみられる。杯は、12・13・14の大型のものと、８～11・15の小型のものがある。11の内面見込み部には、焼成前に刻書された「尖」の文字が残る。該期の土器には墨書や刻書が残る例が極めて少なく、貴重な事例である。19の鉢は、粘土紐輪積み痕が明瞭に残るもので、器面調整がほとんど行なわれていないものである。灰釉陶器は、椀（3～6）・小椀（1）・輪花椀（2）がみられる。いずれも底部は回転糸切無調整である。２の輪花部分は、指で端部を押さえてナデて成形したものである。灰釉陶器は丸石２号窯式期に比定される。覆土

中からは古墳時代の須恵器が出土しているが、混入品と考えられる。これらの特徴から本址出土土器群の時期は、県埋蔵文化財センター編年14期（11世紀末）に比定されるものと考えられる。

**第２号住居址出土土器群**

本址は出土遺物が非常に少なく、図化できる土器はなかった。小片で見る限り古墳時代の可能性が高い。

**第３号住居址出土土器群**

３住も出土土器は非常に少なく、図化できたものは３点のみである。20は須恵器杯である。21は灰釉陶器椀の破片である。覆土上層からのもので、混入品の可能性が高い。22は、須恵器長頸壺底部である。

**土坑１出土土器群**

23は弥生土器壺の下半部である。外面はミガキ調整、内面はヨコ方向のハケメがみられる。胴部中位には径3.7cmの円孔が外面から穿たれている。24は、弥生土器壺の胴部である。外面は横方向にミガキが施され、赤彩されている。内面は頸部にのみ指オサエの痕跡がみられ、胴部はヨコナデ、底面近くでは不定方向のナデ調整がみられる。28～30は小片のため拓影で提示した。これらの土器は、弥生時代中期後半に比定される。

**土坑３出土土器群**

25は弥生土器壺口縁部である。全面ヨコナデ調整で赤彩されている。

**その他**

溝１から近世末の瀬戸美濃産拳骨茶碗の口縁部小片（26）が出土している。18世紀末～19世紀初の所産か。

## ２．金属製品（第７図・第１～５表）

**第１表　主要諸元**

| | |
|---|---|
| 廻収個体数 | 7 |
| 単独率（%） | 100.0% |
| 接合率（%） | 57.1% |
| 平均接合個体数 | 2 |
| 金属製遺物分布密度（点/平米） | 9.7% |
| 三次元座標記録率（%） | 85.7% |
| 帰属層準推定率（%） | 0.0% |
| 遺構帰属率（%） | 100.0% |
| 欠番率（%） | 0.0% |
| 実測率（%） | 85.7% |
| 製品率（%） | 85.7% |

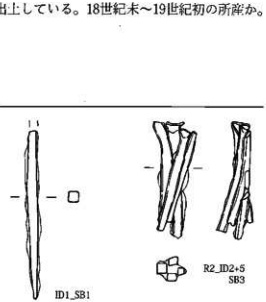
| | |
|---|---|
| 総重量（g） | 80.1 |
| 総個体数 | 7 |
| 接合個体数 | 4 |
| 接合資料数 | 2 |
| 調査面積（平米） | 71.9 |
| 三次元座標記録個体数 | 6 |
| 層位帰属準推定個体数 | 0 |
| 遺構帰属個体数 | 7 |
| 欠番個体数 | 0 |
| 実測個体数 | 6 |
| 産物個体数 | 6 |

**第２表　略号一覧**

| | | |
|---|---|---|
| 遺構略号 | SB | 住居址状遺構 |
| 産物略号 | P | 製品（product） |
| | BP | 副産物（by-product） |
| | UK | 不明（un-known） |
| | PR | 製品率（product rate） |
| | | PR=P/(P+BP) |
| 接合 | R | refitted artifacts + ID（先頭） |

**第３表　遺構単位産物組成と製品率**

| 遺構1 | P | BP | UK | PR |
|---|---|---|---|---|
| SB1 | 1 | - | - | 100% |
| SB3 | 5 | 1 | - | 83.3% |
| 計 | 6 | 1 | - | 85.7% |



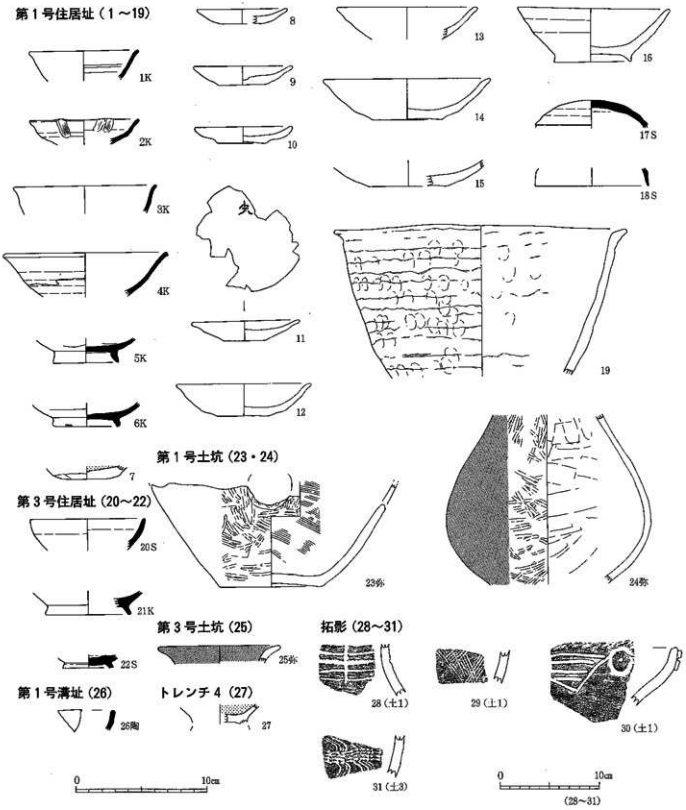

第７図　金属製遺物実測図

**第４表　接合個体別資料一覧**

| 接合番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 長/幅 | 幅/厚 | 形状比 | 形状 | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| R2(2+5) | 50.0 | 15.5 | 15.1 | 3.2 | 1.0 | 3.2:1.0 | 棒状 | 10.9 |
| R3(3+4) | 58.6 | 8.4 | 7.8 | 7.0 | 1.1 | 7.0:1.1 | 棒状 | 4.6 |

**第５表　個体別資料一覧**

| ID | 遺構1 | 遺構2 | 三次元座標 | 金属種 | 産物 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 長/幅 | 幅/厚 | 形状比 | 形状 | 重量(g) | 接合番号 | 実測 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SB1 | No.25 | 確定 | Fe | P | 不明 | 74.0 | 7.1 | 6.8 | 10.4 | 1.0 | 10.4:1.0 | 棒状 | 4.2 | - | ○ |
| 2 | SB3 | No.04 | 確定 | Fe | P | 釘 | 50.0 | 15.5 | 15.1 | 3.2 | 1.0 | 3.2:1.0 | 棒状 | 9.4 | R2 | ○ |
| 3 | SB3 | No.04 | 確定 | Fe | P | 不明 | 27.3 | 7.9 | 7.8 | 3.5 | 1.0 | 3.5:1.0 | 棒状 | 2.7 | R3 | ○ |
| 4 | SB3 | No.04 | 確定 | Fe | P | 不明 | 31.3 | 8.4 | 6.7 | 3.7 | 1.3 | 3.7:1.3 | 棒状 | 1.9 | R3 | ○ |
| 5 | SB3 | No.04 | 確定 | Fe | P | 釘 | 16.0 | 14.7 | 8.6 | 1.1 | 1.7 | 1.1:1.7 | 塊状 | 1.5 | R2 | ○ |
| 6 | SB3 | No.04 | 確定 | Fe | P | 不明 | 19.4 | 7.1 | 5.9 | 2.7 | 1.2 | 2.7:1.2 | 棒状 | 1.0 | - | ○ |
| 7 | SB3 | SP13 | 未記録 | Fe | BP | 滓 | 59.5 | 44.6 | 21.0 | 1.3 | 2.1 | 1.3:2.1 | 塊状 | 59.4 | - | × |


第１号住居址（１～19）
1K
2K
3K
4K
5K
6K
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17S
18S
19
第１号土坑（23・24）
23弥
24弥
第３号住居址（20～22）
20S
21K
第３号土坑（25）
25弥
22S
第１号溝址（26）
26陶
トレンチ４（27）
27
拓影（28～31）
28（±1）
29（±1）
30（±1）
31（±3）
0
10cm
0
10cm
（28～31）
弥生土器赤彩
黒色処理
S：須恵器
K：灰釉陶器
弥：弥生土器
陶：陶器

第８図　土器・陶器

## 第6表　土器・陶器観察表

| No. | 実測番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 残存度 | 色調 | | 成形・調整・形態の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | |
| 1 | 1住-11 | 灰釉陶器 | 椀 | 11.2 | | (3.0) | 口：1/6、底部：欠 | 白灰 | 白灰 | 内外ロクロナデ、漬け掛け施釉 |
| 2 | 1住-12 | 灰釉陶器 | 輪花椀 | 9.0 | | (2.4) | 口：1/6、底部：欠 | 白灰 | 白灰 | 内外ロクロナデ、漬け掛け施釉、指オサエによる輪花成形 |
| 3 | 1住-13 | 灰釉陶器 | 椀 | 14.4 | | (2.5) | 口：1/8、底：欠 | 白灰 | 白灰 | 内外ロクロナデ、漬け掛け施釉、口縁ヨコナデ |
| 4 | 1住-14 | 灰釉陶器 | 椀 | 14.4 | | (4.4) | 口：1/8、底：欠 | 白灰 | 白灰 | 内外ロクロナデ、漬け掛け施釉、口縁ヨコナデ |
| 5 | 1住-8 | 灰釉陶器 | 椀 | | 6.2 | (2.5) | 口：欠、底：1/2 | 灰 | 灰 | 内外面ロクロ調整、底部回転糸切り、高台貼り付け |
| 6 | 1住-15 | 灰釉陶器 | 椀 | | 7.0 | (2.2) | 口：欠、底3/5 | 白灰 | 白灰 | 内外ロクロナデ、漬け掛け施釉、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りのち付け高台 |
| 7 | 1住-4 | 黒色土器 | 杯 | | 6.8 | (1.3) | 口：欠、底：完 | 橙褐 | 橙褐 | 底部～腰部手持ちヘラケズリ、内面黒色処理 |
| 8 | 1住-3 | 土師器 | 杯 | 8.5 | 4.1 | 1.8 | 口：1/8、底：3/4 | 橙褐 | 橙褐 | 内外面ロクロ調整、口縁端部ヨコナデ、底部回転糸切り |
| 9 | 1住-7 | 土師器 | 杯 | 10.0 | 4.9 | 2.0 | 口：完、底：完 | 明褐 | 明褐 | 内外面ロクロ調整、底部回転糸切り |
| 10 | 1住-18 | 土師器 | 杯 | 10.0 | 5.1 | 1.7 | 口：完、底：完 | 赤褐 | 赤褐 | 内外面ロクロナデ、底面回転糸切り |
| 11 | 1住-17 | 土師器 | 杯 | 10.9 | 4.3 | 2.0 | 口：1/2、底：完 | 赤褐 | 赤褐 | 内外面ロクロナデ、底面指ナデ・摩滅、内面見込み部に線刻文字「尖」（焼成前に線刻） |
| 12 | 1住-16 | 土師器 | 杯 | 13.8 | 5.4 | 3.2 | 口：ほぼ完、底：完 | 赤褐 | 赤褐 | 内外面ロクロナデ、底部回転糸切り |
| 13 | 1住-2 | 土師器 | 杯 | 14.4 | | (3.3) | 口：1/4、底：欠 | 橙褐 | 橙褐 | 内外面ロクロ調整、口縁端部ヨコナデ |
| 14 | 1住-6 | 土師器 | 杯 | 17.0 | 7.4 | 4.2 | 口：1/8、底：1/4 | 暗褐 | 暗褐 | 内外面ロクロ調整、底部回転糸切り |
| 15 | 1住-5 | 土師器 | 杯 | | 8.4 | (2.5) | 口：欠、底：1/2 | 橙褐 | 橙褐 | 内外面ロクロナデ |
| 16 | 1住-19 | 土師器 | 椀 | 15.5 | 7.7 | 5.4 | 口：完、底：完 | 橙褐 | 橙褐 | 内外面ロクロナデ、底部回転糸切りのち貼り付け高台 |
| 17 | 1住-9 | 須恵器 | 杯蓋 | | | (3.4) | 口：欠、天井部：完 | 淡青灰 | 淡青灰 | 天井部回転ヘラケズリ、内外ロクロ調整 |
| 18 | 1住-10 | 須恵器 | 杯蓋 | 6.9 | | (1.8) | 口：1/6、天井部：欠 | 灰 | 灰 | 内外ロクロナデ調整 |
| 19 | 1住-1 | 土師器 | 鉢 | 14.9 | | (15.0) | 口：9/10、底：欠 | 橙褐 | 橙褐 | 口縁端部ヨコナデ、外面：粘土紐輪積み調整明瞭、一部指ナデ・指オサエ、内面：ヨコナデ |
| 20 | 3住-1 | 須恵器 | 杯 | 10.7 | | (3.2) | 口：1/5、底：欠 | 灰 | 明灰 | 内外面ロクロナデ |
| 21 | 3住-2 | 灰釉陶器 | 椀 | | 8.8 | (2.4) | 口：欠、底：1/3 | 灰 | 灰 | 内外面ロクロナデ、高台貼り付け |
| 22 | 3住-3 | 須恵器 | 長頸壺 | | 5.0 | | 口：欠、底：完 | 灰 | 灰 | 内外面ロクロ成形、高台貼り付け |
| 23 | 土1-1 | 弥生土器 | 壺 | | 10.3 | | 口：欠、底：完 | 明褐 | 明褐 | 内面底部ハケメ、外面工具ナデのち不定方向のミガキ、体部下半円窓1箇所(外面穿孔) |
| 24 | 土1-2 | 弥生土器 | 壺 | | | 17.0 | 口：欠、底：欠 | 赤褐 | 赤褐 | 外面ミガキのち赤彩、内面肩部指頭圧痕、胴部ヨコナデ、底部不定方向ナデ |
| 25 | 土3-1 | 弥生土器 | 壺 | 11.0 | | | 口：1/6、底：欠 | 赤褐～灰 | 赤褐～灰 | 口縁端部ヨコナデ、赤彩痕あり |
| 26 | 溝1-1 | 陶　器 | 碗 | | | | 口：1/16 | 乳白 | 乳白 | 内外面漆黒釉、瀬戸・美濃挽骨茶碗か |
| 27 | トレンチ4-1 | 黒色土器 | 椀 | | | | 底：1/3 | 明褐 | 明褐～黒 | 内外面ロクロ調整 |
| 28 | 土1-3 | 弥生土器 | 壺 | | | | 拓影 | 淡褐～褐 | 褐 | 横線文のち縦線文 |
| 29 | 土1-4 | 弥生土器 | 甕 | | | | 拓影 | 暗褐 | 灰褐 | ナデのち羽状文 |
| 30 | 土1-5 | 弥生土器 | 壺 | | | | 拓影 | 褐 | 褐 | 口縁端部ＬＲ横縄文、外面：円形貼付文、工具ナデのち山形文・横線文 |
| 31 | 土3-2 | 弥生土器 | 壺 | | | | 拓影 | 暗褐 | 黒褐 | 懸位の波状文のち櫛状文 |

調査区全景（北から）

1住完掘（南から）

1住遺物出土状況

1住平安時代の土器出土状況

2・3住完掘（南から）

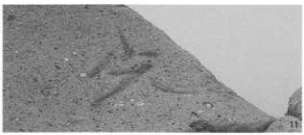
土坑1遺物出土状況（東から）

土坑1弥生土器出土状況

作業風景（南から）

**写真図版（遺構）**

内面見込み部に線刻文字「尖」あり



線刻文字「尖」の拡大

写真図版（遺物）

# 長野県松本市　筑摩遺跡Ⅲ　緊急発掑調査報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ながのけんまつもとし　つかまいせき　きんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 長野県松本市　筑摩遺跡第３次　緊急発掑調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 松本市文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | №183 |
| 編著者名 | 竹内靖長、内堀　団、清水　究 |
| 編集機関 | 松本市教育委員会 |
| 所在地 | 〒390-0874　長野県松本市大手3-8-13　TEL 0263-34-3000㈹<br>（記録・資料保管：松本市立考古博物館　〒390-0823　松本市大字中山3738-1　TEL0263-86-4710） |
| 発行年月日 | 2006（平成18）年３月24日（平成17年度） |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| つかまいせき<br>筑摩遺跡 | ながのけんまつもとし<br>長野県松本市<br>つかま<br>筑摩２丁目2851-1 | 20202 | 165 | 36°<br>13′<br>11″ | 137°<br>59′<br>19″ | 20050425～<br>20050517 | 71.9㎡ | 民間宅地分譲事業（15区画）に伴う緊急発掑調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 筑摩遺跡 | 集落址 | 弥生<br>古墳<br>平安 | 竪穴住居址３・土坑14・ピット18・溝１（自然流路） | 土器・陶器、金属製品 | 弥生時代中期・古墳時代後期・平安時代末の集落址。平安時代末としては類例が少ない刻書された土師器が出土した。 |


松本市文化財調査報告　№183
長野県松本市

**筑摩遺跡　Ⅲ**

―緊急発掑調査報告書―

発行日　平成18年３月24日
発行者　松本市教育委員会
〒390-0874
長野県松本市大手3-8-13
印　刷　株式会社　プラルト